

小説の未来（10）

春日信彦

当然のことですが、小説家は、学者でもなければ評論家でもありません。そのことを前提として私なりの小

文学の印象

文学に興味がない方でも、小学生のころ、夏目漱石（なつめそうせき）、芥川龍之介（あくたがわりゅうのすけ）、川端康成（かわばたやすなり）などの名前を聞かれたことがあると思います。彼らは、文豪（ぶんごう）と呼ばれ、国民に親しまれています。

でも、結構、文章が難しいため、文学とは、凡人には理解できないような難解なもので堅苦しいもののように思われているのではないのでしょうか？彼らの作品を読んでも、難しい漢字やまったく意味の分からない言葉がやたらと出てきます。きっと、中学生であれば、2, 3行読んだだけで、嫌気がさすのではないのでしょうか？

ちなみに、明治、大正、昭和の文豪たちの学歴を調べてみると、さすがに文豪だけあって、ほとんどが東大卒なのです。このことを知れば、なおさら、文学は難しいものだと思ってしまう。東大卒の文豪には、夏目漱石（文学部）、芥川龍之介（法学部）、川端康成（文学部）、森鷗外（医学部）、三島由紀夫（法学部）、安部公房（医学部）、大江健三郎（文学部）、などいます。

また、中退者にも、太宰治、谷崎潤一郎、志賀直哉、などの文豪がいます。森鷗外のように、医学博士であって文学博士でもあるという作家もいるわけですから、文学なんて、秀才の趣味であって、凡人がたしなむものではないように思ってしまう。

でも、私が大好きな松本清張（まつもとせいちょう）は、びっくりするような学歴です。なんと、驚くなかれ、小学校卒なのです。彼は、小学校を卒業して、働きながら文学の勉強を独学でやってのけました。そして、見事、文豪と肩を並べるまでになったのです。また、推理小説のパイオニアであり、多くの読者を獲得した大衆作家になったのです。彼は、高学歴ではありませんが、きっと、文学の才能は多分にあったのでしょう。

私は、文学者の学歴にはそれほど興味はないのですが、彼らの生き立ちには興味があります。特に、幼少のころの環境に強く興味を惹かれます。というのは、作品には、作家の個性が現れますが、やはり、作家の個性を形成するうえで核となっているものの一つに、幼少のころに無意識に形成された性格があると思うからです。

上記の作家の中には、森鷗外や安部公房のような医学部卒の作家がいますが、医者にならず作家になった要因の一つに、幼少のころに形成された潜在的な性格があるのではないかと考えています。

彼らの幼少期を調べてみると、一般的でない環境というべきかもしれませんが、不遇な環境に育った作家がいます。川端康成は、1歳の時に父親を、2歳のころには母親を亡くしています。夏目漱石は、里子に出されて育っています。三島由紀夫は、祖母に女の子のようなしつけをされて、過保護に育てられています。芥川龍之介は、叔母に養育され、11歳の時、叔父の養子となっています。太宰治は、生まれてすぐから乳母に育てられ、3歳から小学校までは女中の子守で育てられました。

文豪と呼ばれる作家たちは、秀才で文才に恵まれていたからこそ、歴史に残る作家になったと思いますが、彼らの中には不遇な幼少期という一面を持ち合わせた作家たちもいたのです。

おそらく、幼少期における不遇の経験は、“悲しみ”という心の傷となり、一生心の底に眠っていたに違いありません。そして、その悲しみは、作品の創造に影響を与えていたと思います。

人生は、逆戻りできません。だから、その人の環境も心の傷も、自分ではどうすることもできなかった宿命と言えます。また、神様のいたずらなのか、その宿命に引きずられるように秀才である彼らは、文学の道を歩まされたようにも思われます。

川端康成の“伊豆の踊子”は大好きな作品の一つですが、この作品から、人生の宿命を感じてしまいました。学生と踊子は、偶然の出会いで愛し合いますが、のそれぞれの生きる道の違いが、悲痛な別れを二人に与えました。その後、二人は、どのような運命を歩んだかは、誰も知る由もありません。

小説家は、人間をいろんな角度から見つめ、独自の構想を練り上げ、架空の世界を作り上げていきます。そして、自分が作り上げた架空の世界を公表する芸術家なのです。だから、常識に反した言動を取った場合、誤解されることもしばしばあるのではないのでしょうか？

三島由紀夫、川端康成、太宰治、などの自殺は、謎に包まれ、いい印象を与えるものではありません。でも、小説家としては、歴史に残る素晴らしい作家だと思っています。私は、趣味で小説を書く凡人ですから、作品の評論はできません。でも、作家の生い立ちを知ると、作品の根底にある悲しみがなんとなく伝わってくるのです。

私は、高学歴でも秀才でもありません。また、高度に洗練された文章を書く文才もありません。そのことを承知したうえで、私が書きたい作品は、中学生や高校生でも十分に読みこなせる作品です。これからも、多くの読者から、“分かりやすく、楽しめた”と言っていただけの作品を書き続けたいと思っています。

“覚えのいい人”は、勉強が出来る秀才のイメージがあって、なんとなく印象がいいのですが、“疑い深い人”はいかがなものでしょうか。ちょっと陰険で人づき合いが悪い印象を持ちますね。私は、後者の“疑い深い人”に属します。

覚えのいい人は、医者、弁護士、教職、のような資格を必要とする仕事に向いていると思いますが、疑い深い人はどのような職業に向いているのでしょうか？小学生の頃はそうでもなかったのですが、中学生になったころから疑い深くなりました。とにかく、物事を素直に受け入れられなくなってしまったのです。

おそらく、多くの方は、このころになると大人の世界を嫌悪する時期ではなかったでしょうか？例えば、学歴社会です。受験勉強をして、いい大学に入るのが、立派な人間なのか？学歴で人を差別していいのか？そんな疑問を一度は抱かれたのではないのでしょうか？

確かに、社会制度には、それなりのメリットはあります。でも、一方では、デメリットもあるわけです。人は、常識的な一面ばかりにとらわれて、気づきにくいもう一面を見逃しやすいのです。

確かに、将来、医者や弁護士のような資格取得が条件の仕事につきたい人たちにとっては、多くの知識は必要です。だから、多くの言語クイズをやって、多くの言語知識を得ることは無駄ではありません。

でも、学歴という社会的資格を得るために長時間にわたって脳を酷使することは、言語中枢の発達には役立ちますが、一方、常識を疑うという心を失ってしまいます。また、独自の考えを構築する脳の発達の妨げになります。

つまり、受験という言語クイズは、言語中枢を発達させるのには役立つが、疑う心と独自の創造の育成には役に立たないということなのです。記憶力の低い私の場合、受験勉強によって多くの知識を得ることはできませんでしたが、疑う心と小説を書くという創造の育成はできたようです。

当然、受験勉強において優秀であればそれに越したことはないのですが、記憶力が悪くて、希望する学歴を手に入れることができなかつたとしても、決して悲観することはないように思うのです。

確かに、学歴は、就職において大きな武器となるでしょう。でも、社会生活をしていく上では、学歴以上に人間関係が重要になります。当然、人間関係において、言語力は重要な役割を果たします。そのことを考慮しても、還暦を迎えたこの年になって言えることなのですが、言葉を超越した心の働きによる人間関係があると思っています。

言い換えると、いかなるものにも、長所と短所があつて、ある事に秀でなかつたことが、他の一面のメリットとなるということです。先ほどの例でいえば、受験勉強で秀でなかつたことが、小説を書くうえではメリットとなった、と言えるのです。

私は、自分を疑い深い人と言いましたが、今でも常識を疑っています。私の場合、疑うことを止めてしまえば、小説は書けなくなってしまう。私にとって疑うことは、小説の創造の核となっているのです。

常識を疑うと言いましたが、疑う対象は、自分自身の常識、心、感情です。自分自身をとことん疑い、解析し、次に、それらのデータを集積し、創造するのです。疑うということ、マイナスのイメージを抱かれやすいのですが、決して、疑うとは、否定することではありません。

私は、アマ作家なので、プロ作家のように出版社の要望に応えるというような苦勞はありません。そのことを考えれば、アマ作家は、自由気ままだと言えるのですが、だからこそ、プロ作家が書けないような作品が書けるのだと思っています。これからも、私は、疑い深い作家として、自由気ままに作品を公開できる作家でありたいと願っています。

恋愛小説であれ、推理小説であれ、それらは主人公を中心とした人間関係のドラマです。言い換えると、主人公を取り巻く家族、学校、職場、国家などにおける人間関係を描くこととなります。

それでは、家族、学校、職場、国家という組織とはいったい何なのかを考えてみましょう。人は、生まれて家族という集団の一員となります。そして、人は、学校とか職場の一員として生きていきます。

家族は、人の集まりですから、生物的組織と言えます。同じように、国家も人の集まりですから、生物的組織と言えるでしょう。だから、あらゆる人は、集団に生きる人間相互の心の作用を受けながら行動しています。また、お互いの利害が円滑になるように、法律や道徳や一般常識という規制に拘束されながら行動します。

そこで、人の集団が国家なわけですから、国家を考える場合、構成員である国民について考えていくこととなります。国民は、自分の意思で自分たちの代表を決定し、自分たちの思いを彼らに託します。そして、彼らは、国民の意思を実現するために、議会、行政、司法で国民の意思を実現させるための行動をします。

そう考えれば、国家は国民のために機能する生物的組織と言えます。ところが、生物的組織であるはずの国家が、どんなに解析しても理解できないような「非生物的な側面」を持っているのです。それは、怪奇現象と言っても過言ではないのです。

そこで、小説とのかかわりですが、国家が持つ“生物的側面と非生物的側面”をいろんな角度から眺め、解析し、それをもとにドラマ展開しようと試みるのが私のフィクション小説なのです。

家族、学校、職場、国家などは、生物集団ですから、生物学的に理解できます。幸せな生活を望む動物である私たちには、本能的というべき共存感情があり、決して不必要な争いはしません。現に、家族において、よほどの事情がない限り、殺傷事件は起きません。

野生の肉食動物を見てお分かりのように、必要な食糧確保を目的とした殺傷は行われますが、そのこと以外の目的をもった殺傷は起きません。これは、動物の生命欲が、お互いの生存を尊重するかのように制御されているのでしょう。そのことから考えれば、当然、動物である人間も、お互いの共存を尊重して無益な殺傷を起こさないものと考えられます。

ところが、生物学的に理解できない組織的人間の行為があるのです。それは、おそらく、国家が誕生して以来続いていると思われる、国家が国民に強制する殺傷行為、言い換えれば、敵国の人々を殺傷させる「戦争行為」です。

人間集団である国家には、国家意思というものがあります。この国家意思は、人間的なものであるはずですが、どうもそうではないようなのです。それは、なんとも不可解な非生物的な側面を持っているのです。

我々のほとんどは、自分の意思、常識で行動していると思っています。そのことは、決して間違いとは言えないのですが、それでは、我々の心を動かしている常識は、いったいどこから来たのでしょうか？この常識を作り、それを我々の潜在意識に刷り込ませているのは、他でもない、我々が妄信している国家なのです。

小説家にとって、国家を登場させる場合、かなり厄介なのです。作家は、学者でもなければ評論家でもないわけですから。国家について書いたとしても、それは、フィクションとしての国家なのですが、読者は、作家が現実的に国家をそのように考えていると判断しかねないのです。

だからと言って、護身のために、作家が、国家行為を無視した作品を書くわけにはいかないのです。前述したように、人の心と行為は、国家にコントロールされているからです。また、当然のことなのですが、人物を描く場合、必然的に国家がかかわってくるのです。

私は、これからも、疑い深い作家であり続けると思いますが、作家たちは、それぞれに個性があり、それぞれの信念をもって歩み続けられればいいと思います。これから、作家を志す人たちは、疑う心を失わず、勇気をもって自分の道を突き進んでほしいと願っています。